

上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿

—— 李商隱篇(12) ——

門 脇 廣 文

Commentary on the Four Poems of Li Shang-yin
in the *Tang-shi jian-shang ci-dian* (Dictionary for
the Appreciation of the Tang Poems. Published by
the Shang-hai Dictionary publication Company)
— A Draft Translation with Annotations.

KADOWAKI Hirofumi

[目 次]

はじめに

[45]	楚吟	王思宇
[46]	瑶池	王思宇
[47]	韓冬郎	陳伯海
[48]	板橋曉別	劉学諧

はじめに

昨年度（2003年度）にひきつづき、上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》所収の李商隱詩についての賞析文の訳注稿四篇を公表する。現在のメンバーは大東文化大学文学部非常勤講師の三枝秀子、外国語学部非常勤講師の何旭、学部卒業生の関久美子（現在、東京学芸大学教育学部非常勤講師）、後藤庸介、大学院博士課程後期課程2年の宮下聖俊、秋谷幸治、博士課程前期課程2年の鈴木拓也、博士課程前期課程1年の石川優子、そして私（門脇）の九人である。現在、[66] 無題二首の翻訳を行なっている。なお、今回の担当者は次の通り。

[45]	楚吟	宮下聖俊
[46]	瑶池	関久美子
[47]	韓冬郎	三枝秀子
[48]	板橋曉別	秋谷幸治

楚吟

山 上 離 宮 宮 上 楼
 楼 前 宮 畔 暮 江 流
 楚 天 長 短 黄 昏 雨
 宋 玉 無 愁 亦 自 愁

楚吟

山上の離宮 宮上の楼
 楼前の宮畔 暮江流る
 楚天 長短 黄昏の雨
 宋玉愁ひ無くも亦自ら愁ふ^{おのづか}

この詩は馮浩⁽¹⁾の《玉谿生詩集箋注》⁽²⁾では開成五年（840）から会昌元年（841）の春にかけて、李商隱が楚に滞在していたときに作られたものであると判断しており⁽³⁾、張采田⁽⁴⁾の《玉谿生年譜會箋》⁽⁵⁾では大中二年（848）の夏、作者が桂管⁽⁶⁾の觀察使である鄭畋⁽⁷⁾の幕府を離れた後、荊楚にとどまっていた⁽⁸⁾時の作品であると確定している⁽⁹⁾。二つの説のいずれが確かであるのか、現在では判定を下すのは困難と思われる。

1

この詩は楚国の事を詠むことにかこつけて、作者の考えや思いを表現した七言絶句である。詩の三句目までは、いずれもみな眼前に見えている景色を描写したものである。

はじめの二句（山上離宮宮上楼 楼前宮畔暮江流）には四種類の景物がえがかれている。詩中の「山」とは巫山のことであり、今の四川・湖北の二省が境を接しているところにある。「離宮」とは、正式の宮殿のほかに帝王がかりに住まう宮殿のことである。ここでは、今の四川省巫山県の西北にあった楚宮のことを指している。つまり宋玉の〈高唐賦並序〉にえがかれている⁽¹⁰⁾、宋玉と楚の襄王が遊んだ地なのである。「江」とは長江のことである。

この二つの句は、前の語や句の最後の文字を次の語や句の頭にしりとり式に用いるという修辞法を取り入れて、「楼」と「宮」とを重ねて用いている。そしてこの二語の意味に重みと奥行きを持たせて、その主体としての地位をきわだたせ、さらに題の「楚」という字と結びつけているのである。

はじめの一句は「山上」から「離宮」へ、さらに「宮上の楼」にまで、下から上へと、一段一段、読者の視線を最も高いところにまで導いている。次の句では今度は「楼」から「宮」へ、「宮」からそして「江」へ、上から下へと、一段一段、読者の視線を最も低いところへといざなう。それによって鮮明な立体的印象をあたえるのである。

さらに、「暮江流」の「流」の字からは、尽きることなく月日が流れているということが感じられる。この宮殿や楼が姿を現した日から、時は流れ流れて現在にまでいたっており、これから後も永久に流れ続けていくのだ。在りし日の楚国はすでに過去のものとなった今、ただ「離宮」

だけがもとのままであり、「暮江（夕暮れ時の長江）」は東に流れ続けている。その景色は時代の移り変わりや時の移ろいやすさへの嘆きや愁いに満ちている。

2

前の二句で、すでに荒涼とした光景を描いているが、第三句の「楚天長短黄昏雨」でも、意味を重ね持たせるような書き方でさらにそれを際立たせている。この句は現象を描く語によって構成されているが、内容は二つのことを含み持っており、その構想はとても巧みだ。この句は実際に目の前の情景を描いている。だがそれだけではなく「黄昏雨」の三字は、宋玉の〈高唐賦並序〉で巫山の神女が自ら「旦為行雲、暮為行雨（朝には流れる雲となり、夕暮れには降る雨となる）」と言ったその言葉の意味と、〈神女賦並序〉に見える楚の襄王が夢で神女に会った事⁽¹¹⁾をもふまえて用いているのである。

「長短」の二字は、これを一方の意味に重きを置いた複合語とみなして、「長」の意味をとると、「楚の空（楚天）」を形容していると言うことができる。なぜなら巫峡の一带では、長江の両岸はともに崖が高く切り立って、雲にとどくほどに向きあってそびえているので、ただ空がほそながく見えるだけなのだ。それゆえ「巫山巫峽氣蕭森（巫山巫峽の気は蕭森としている）」（杜甫〈秋興八首〉⁽¹²⁾）のような、おくぶかくてはかりしれないという印象を人にあたえるのである。またこの「長短」は夕暮れの雨を形容していて、その雨粒の長かったり短かったり、途切れるようでもあり続いているようでもある、と言っているとすることもできる。楚宮を夢や幻のような雰囲気で覆い、襄王が夢で神女に会ったことと結びつけているのである。しかも二句目の「江」には特に「暮江」を取りあげていて、この三句目の「雨」はわざわざ「黄昏雨」を描いている。その意図は、その周囲を取りまくもののものさびしさをきわだたせることにあるのである。

3

以上の三句は、一幅の「楚宮暮雨の図」を描いていると言うことができる。このなかの、黄昏時の景色がぼんやりとわびしげであること、冷たい雨風が長江の水面をたたいていること、楚宮は見わたすかぎり荒涼としていること、そのすべてが人の愁いを誘うのである。だから結句（宋玉無愁亦自愁）では、当時の宋玉がこの情景に向かったとしたら、たとえ愁いがなかったとしても、悲しみ愁えてやまないだろう、と言い、詩全体の主旨を指し示しているのだ。

「無愁」と「亦自愁」とが対になって句を構成しており、それゆえ変化に富み、悲しみや愁いの深さがよりあらわになるのである。前の三句ですでに悲しげで哀愁ただよう雰囲気を色濃く醸しだしているので、この末句の内容はとても自然に感じられる。

ここでの「愁」いは表面的に見ればただ景色によって生じたものだけのようだが、実は二つの

意味を含んだ言葉なのである。宋玉の〈九辯〉⁽¹³⁾には、楚国の国勢は非常に危なく、賢才は道にまよい、「坎廝して、貧士 職を失ひて志 平らかならず（境遇が苦難に満ちていて志を得ず、貧士は職を失って志は平らかでない）」、「余 萎約して悲しみ愁ふ（わたしは衰えやつれて悲しみ愁えている）」とある。これと、先の句で「黄昏の雨」を用いて襄王の酒食に溺れ墮落していることを暗に指しているのとは、その言わんとしていることはまったく同じである。だから何焯⁽¹⁴⁾が評論で言う「長晷短景、ただ雨を夢みる有れば、則ち賢者は何れの時にか復た近からんか。此れ宋玉 多く愁ふる所以なり（年がら年中、神女のことを雨として夢みてばかりいるならば、賢才はいったいいつ王に近づいて国の大事を語ることができようか。これが宋玉がおおいに愁えている理由である）」⁽¹⁵⁾（《李義山詩集輯評》⁽¹⁶⁾に見える）とは、作者の意図していることを説明しているものなのだ。

李商隱は政治の世界ではまったく望みを果たせず、一生のうちのほとんどを幕僚として過ごした。だから詩中の宋玉とは、実は作者自身なのである。そして詩中に表現されているのは、ほかでもなく作者の、むなしく歳月が流れ、志を果たせていないことへの憤りであり、統治者が賢才を用いないことに対しての怒りであり、唐王朝の前途に対する憂いなのである。

4

この詩のことばはまるで話し言葉のように解りやすいが、芸術性についていえばその構想はとても巧みである。この詩は史実を写しているのでもなければ、議論をしているのでもない。テーマを取り巻く様々なシンボリックな景物を用いて、ひとつの特殊な空間を形づくっており、それによって人に何かを感じ取らせ、その何かに作者の考えや想いを託しているのだ。

また、三・四句の言葉だけがふたつの意味を帯びているのではなく、詩全体でもふたつの意味をあわせもっている。四句目の「愁」について言うと、そこには三つの内容が含まれる。それは景色によって生じてきた宋玉の愁い、国やわが身の行く末を思つての宋玉の愁い、宋玉の愁いそのままの作者の愁いである。しかもこの三者は分かちがたく合わさっていて、かすかな合わせ目すら見えず、その内容はこの上なく奥深い。

田蘭芳⁽¹⁷⁾はこの詩を「只 意興の上に在りて想見す（詩として形づくられた世界でおしはかり察せられる）」⁽¹⁸⁾（馮浩の《玉谿生詩集箋注》に引く）と称賛している。また馮浩は「詞を吐き含味すれば、妙なること神境に臻り、人をして其の意を知らしめて敢て其の事を指して以て之を実さず（ことばを口に出してかみしめ味わえば、その素晴らしさというものは神境にまでいたっており、読者にその作者の真意を覺らせるけれども、決してその事をはっきりこれだと言ってしまうわない）」⁽¹⁹⁾と述べている。両者ともまさにこの詩の芸術的な構想の絶妙なることを言っているのだ。

王思宇（宮下聖俊訳）

- (1)馮浩：清代の1719-1801年。桐郷の人。字は養吾。孟亨と号した。乾隆の進士。官は御史。
- (2)《玉谿生詩集箋注》：清、馮浩箋注。6巻。またの名を《玉谿生詩詳注》・《玉谿生詩箋注》ともいう。
- (3)馮浩…楚に滞在していたときに作られたものであると判断しており：馮浩《玉谿生詩集箋注》の〈楚吟〉の項には、直接このように言明している注はない。また、《玉谿生年譜》の「開成五年」と「会昌元年」にも〈楚吟〉の名は挙げられていない。ただ「開成五年」には、李商隱はこの年潭州等に遊び、その時に滞在した地域がどこも楚の近くであったから、それらの地域をまとめて「楚」と詩に詠んでいるのだ、とある。そして、その時に詠まれた詩はとても多く、細かくすべてを挙げることはできないとしている。また同じ「開成五年」の文末に「凡此遊蹟風懷、得其大略、而無可細尋、故不能編年、特彙列第三卷中」とあり、〈楚吟〉は第3巻に収められている。そのため、王思宇氏は、「認為（馮浩は～と判断している）」と述べているのであろう。
- なお、高橋和己氏（『李商隱』）に依れば、開成四年に秘書省校書郎から弘農尉となった李商隱が、すぐに辞職して会昌元年に南方の潭州のあたりへ旅したのは、李宗閔党の一人である楊嗣復をたずねて赴き、自らに降りかかる誤解をとこうとしたものである、という。
- (4)張采田：近人。1862-1945年。字は孟劬。遯堪居士と号した。錢塘（今の浙江省杭州）の人。
- (5)《玉谿生年譜会箋》：張采田の撰。1911年に成り、吳興の劉氏が1916年に刊行した。朱鶴齡・徐樹谷・程夢星・馮浩の年譜を参考にし、特に馮浩の《玉谿生年譜》を基礎として余計なところを削り足りないところを補って成したものの。
- (6)桂管：地名。広西省桂林県の地。
- (7)鄭重：唐、滎陽の人。字は子佐。元和の進士。官は給事中、桂管觀察使。李徳裕の党人。吳湘の獄に坐し、循州刺史に貶せられ卒す。《旧唐書》巻178列伝第128の鄭畋伝の中に伝あり。《新唐書》巻185列伝第110の鄭畋伝の中に伝あり。
- (8)荊楚にとどまっていた…：荊楚とは、今の湖北省・湖南省一帯の地を指している。高橋和己氏（『李商隱』）に依れば、李商隱は朋党の争いに禍されて、鄭重に左遷されたあと、大中二年の秋にいったん帰郷して、冬に盤屋県の尉となった、といい、この、秋にいったん帰郷する前に荊楚に留まっていたと考えられる。
- (9)張采田…荊楚にとどまっていた時の作品であると確定している：張采田《玉谿生年譜会箋》の「大中二年」の条の中に、はっきり〈楚吟〉の名が挙げられ、割り注として「馮氏云：『吐詞含味、妙臻神境、令人知其意、而不敢指其事以実之』」と馮浩の説を引用した後、同じく割り注で「箋曰：此亦荊楚感遇之作。『楚天長短黄昏雨』、蓋南方五月梅雨時往往有此景象也」とある。
- (10)宋玉の〈高唐賦並序〉にえがかれている：〈高唐賦序〉（《文選》巻第19所収）に「昔者楚襄王與宋玉遊於雲夢之台」とある。
- (11)〈神女賦並序〉に見える楚の襄王が夢で神女に会った事：〈神女賦序〉（《文選》巻第19所収）

に「其夜王寢、果夢與神女遇」とある。

(12)「巫山巫峽氣蕭森」(杜甫〈秋興八首〉)：大暦元年の秋、夔州の西閣に在った時、事に感じて作った八首の連作。毎篇必ずしも秋景を叙していないが、もと秋に感じて作ったものであるから秋興と題した。ここで引用されているのは、第一首「玉露凋傷楓樹林、巫山巫峽氣蕭森、江間波浪兼天湧、寒上風雲接地陰、叢菊兩開他日淚、孤舟一繫故園心、寒衣處處催刀尺、白帝城高急暮砧」の第二句目。

(13)〈九辯〉：《文選》卷第33所収。「坎廪兮貧士失職而志不平」、「余萎約而悲愁」とある。

(14)何焯：清、長洲の人。字は岢瞻(岐瞻)。茶仙・香案小吏・無勇・潤千・憩間老人と号す。義門先生と呼ばれた。康熙中、挙人を賜り、進士に挙げられ、官は武英殿修書に至った。学は考訂に長じ、居所を賁硯齋と名づけ、また語古小齋・承篋書塾という。著に義門読書記がある。

(15)年がら年中、神女のことを…これが宋玉がおおいに愁えている理由である：「長晷短景、但有夢雨、則賢者何時復近乎？此宋玉所以多愁也」

(16)《李義山詩集輯評》：3巻。清、朱鶴齡箋注、沈厚垓輯評。同治9年刊行。

(17)田蘭芳：清、睢州の人。字は梁紫。簣山・独傭子と号す。順治帝の諸生。湯斌らと志学会を起こし、篤実にして自ら欺かざるを旨とする。講道存書院の主となり、子弟甚だ多し。門人私に諡して誠確先生という。書室を逸徳軒という。著に逸徳軒集がある。

(18)詩として形づくられた世界でおしはかり察せられる：「只在意興上想見」

(19)ことばを口に出してかみしめ味わえば…決してその事をはっきりこれだと言ってしまわない：「吐詞含味、妙臻神境、令人知其意而不敢指其事以実之」

瑶池
 瑶池阿母綺窓開
 黄竹歌声動地哀
 八駿⁽¹⁾日行三万里
 穆王何事不重来

瑶池
 瑶池の阿母 綺窓開き
 黄竹の歌声 地を動かして哀しむ
 八駿 日に行く 三万里
 ぼく 穆王 何の事か 重ねて来らざらん

晩唐では、多くの皇帝が神仙の道を信じた。丹葉⁽²⁾とよばれる靈薬を服用してひたすら長寿を願ひ、果ては不老長寿の靈薬とされる金丹⁽³⁾の毒で命を落とす有様だった。

この詩は、不老長寿を求めることの嘘や偽りを風刺したものである。

1

「瑶池」は、古代の神話に登場する仙人、西王母⁽⁴⁾が住んでいた場所である。詩中の「阿母」とは西王母のことである。《漢武帝内伝》⁽⁵⁾では、西王母を「玄都阿母」と呼んでいる。

《穆天子伝》⁽⁶⁾の記載によれば、周の穆王⁽⁷⁾は西へ旅して崑崙山⁽⁸⁾に至り、西王母に会ったという。西王母は瑶池で宴を催し、穆王を招いた。別れ際、西王母は歌を作って彼に贈った。

白雲在天 白雲 天に在りて
 山陵自出 山陵 ^{おのづか} 自ら出づ
 道里悠遠 道里 悠遠にして
 山川間之 山川 ^{へだ} 之を間つ
 将子無死 ^{ねが} 将はくは ^し 子死ぬこと無かれ
 尚能復来 ^{こひねが} 尚はくは能く ^ま 復た来らんことを

(白雲が空に浮かび、山々はそびえ立つ。道のりは遙か遠く、山や川が間を隔てているけれど。どうか命を落とされませんように。またおいでくださることを願っております)

穆王もこれに答えて歌った。

比及三年 三年の ^{ころほひ} 比及
 将復而野 ^{まさ} 将に ^{なんぢ} 而の野に ^{かへ} 復らんとす

(三年ほどしたら、あなたのいるこの地に帰ってきましょう)⁽⁹⁾

さらに記すところでは、穆王が南へ旅した際、黄竹⁽¹⁰⁾へ向かう途中で北風と降雪に見舞われた。寒さに凍える人々を目にした穆王は、〈黄竹〉詩三章を作ってこれを哀れんだという。⁽¹¹⁾

この詩は、上記の伝説にもとづいて構成されたものである。作者は、西王母が穆王の「復た来^ま」ることを願い、穆王もそれを承諾している点をとらえ、西王母が穆王の帰りを待ち望むというストーリーを作りあげたのである。

西王母は彫刻で飾られた窓を押し開き、東の方を望み見る。

だが穆王の姿は見え、ただ〈黄竹〉の歌声が大地を揺り動かすほどに哀しく響くのが聞こえるばかり。

一句目（瑶池阿母綺窓開）は仙界の美しい景色であり、二句目（黄竹歌声動地哀）は人間界のもの悲しい情景である。両句は実に鮮明なコントラストを織りなしている。

さらに、この対比の中には二重の意味が込められている。ひとつは、歌を作った本人はすでに死に、その歌を歌う声だけがいたずらにこの世に残っていることを暗に喩えている。つまり、仙界は美しいが、歌の作者である穆王は、残念ながらそこで暮らせるだけの運命にはなかったのである。この中には、不老長寿を求めることに対する、嘲笑のニュアンスも含まれている。もうひとつは、〈黄竹〉詩の内容⁽¹²⁾を用いた暗示である。人々が寒さや苦しみを受けているのに、統治者は不老不死を追い求め、永遠に生きながらえることばかりを考えていると言っているのである。そこには、統治者が神仙を信じて不老長寿を求めることに対する、譴責の意が込められている。

詩の後半二句（八駿日行三万里 穆王何事不重来）では、穆王に会えないことにより生じた、西王母の心の揺れを描いている。

穆王の車を引く八頭の駿馬は飛ぶように走り、一日に三万里も進めるのだから、来ようと思えば、簡単に来られるはず。

それなのに、どうして彼はいまだ約束どおりやって来ないのかしら。

西王母は穆王の再訪を心から望み、穆王もまた来ることを約束した。しかもそれはたやすいことで、八駿を駆ればあっという間である。しかし、穆王はとうとう来なかった。——穆王はすでに死んでいるのだと言わずとも言葉にするまでもなく、その死はおのずから明らかだ。

だが、西王母はなおも窓を開けて彼方を眺め、一途に待ち続けているのである。そのことは、西王母は穆王が死なないよう願ったが、結局その望みがかなわなかったことを意味する。つまり、西王母のような仙人をしても、穆王を死から救うことはできないのである。そうだとすれば、世間でいう不老長寿の方術など、当然なおのこと当てにはならない。不老長寿を求めることの嘘偽をいちいち説くまでもなく、これらのことがその嘘をおのずと物語っている。

不老長寿を求めることを風刺するというのは、本来、議論や道理の説明を十分に重ねなければならないテーマである。しかし、この詩では議論の言葉を一文字も加えていない。作者の言わんとしていることは、西王母の行動や心の動きの中に完全に溶け込んでいる。そして、具体的かつ生き生きとしたイメージを通してあらわれ出ているのである。その構想は絶妙だ。

四句目（穆王何事不重来）は、西王母が心に抱いた疑問であって、詩人が直に投げかけた疑問のことばではない。このため、たとえ詩中の風刺が鋭く容赦のないものであっても、表現方法は婉曲で、あからさまな嘲笑にはなっていないのである。

紀昀はこの詩を評して、「言いたいこと、心に思うことを全て語り尽くしている。だが、詰問のことばを曖昧に表現しているので、語り尽くすといっても全てをことばにしているわけではないのだ」⁽¹³⁾と言っている（《李義山詩集輯評》）。紀昀の言うとおりに、後半二句で直接責め立てることをしないので、この詩は明快な中にも味わいや趣があり、読むといつまでも余韻が残るのである。

葉燮⁽¹⁴⁾は「李商隱の七言絶句は、内に込められた意味が深く、しかも表現のしかたが婉曲である。このような詩は当分現れないだろう」⁽¹⁵⁾と称えている（《原詩》⁽¹⁶⁾）。この詩はその一例である。

王思宇（関久美子訳）

(1)【原注】八駿：穆王の車を引いていた八頭の駿馬。《穆天子伝》に、それぞれの名を赤驥、盜驪、白義、逾輪、山子、渠黄、驊騮、緑耳と記す。（巻一）

(2)丹藥：道教で、丹砂（水銀と硫黄の化合物。朱砂、辰砂ともいう）を用いて作る薬のこと。強精や不老の靈薬とされた。

(3)金丹：方術士が黄金を練って作るという、不老不死の薬。鍊金丹。

(4)西王母：神話伝説上の女の仙人。《穆天子伝》巻三注には「西王母、如人虎齒、蓬髮戴勝、善嘯」とある。穆王と瑤池で宴した話のほか、漢の武帝に仙桃を授けた故事などでも知られる。

(5)《漢武帝内伝》：一卷。《漢武内伝》ともいう。後漢の班固（32-92）の撰とされるが不詳。漢の武帝の出生時から没後に至るまでを記す。

なお、王思宇氏の原文は《漢武故事》とするが、同書に「玄都阿母」の記述は見えない。馮浩《玉谿生詩集箋》に「称王母為玄都阿母、見武帝内伝」と示すように、《漢武帝内伝》に「伝言玄都阿母昔出配北燭僊人近又召還使領命祿真靈官也」との記述があり、ここではこれによる。

(6)《穆天子伝》：六巻。著者・成立年代とも不明。もとは西晋の咸寧五年（279）に河南の汲郡にある魏の襄王（BC299没）の墓から発掘された竹書。先秦時代の古い文字で書かれていたものを

荀勗^{じゆんきよく}、和嶠^{か きやう}らが今体文に書き写し、東晋の郭璞（276-324）が注を施したものが今日伝えられる。

《穆天子伝》という書名は晋代の学者がつけたもので、原題は不明。周の穆王が八駿に乗って天下を周遊したことが年代記風に記されている。

(7)周の穆王：〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿—李商隠篇(11)—〉(《大東文化大学紀要》第42号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成16年3月31日)の〔42〕〈宮妓〉の注(12)参照。

(8)崑崙山：崑崙山ともいう。古代、中国の西方にあると考えられた靈山。伝説では、山上に瑤池、閼苑、増城、閼圃などがあり、西王母が住むとされた。

(9)周の穆王は西へ旅して崑崙山に至り、西王母に会ったという。…(三年ほどしたら、あなたのいるこの地に帰ってきましょう)：《穆天子伝》巻三に「天子賓于西王母」とあり、注に「穆王十七年、西征崑崙丘、見西王母賓于昭宮」と見える。さらに「天子觴西王母瑤池之上。西王母為天子謠。曰『白雲在天、山陵自出。道里悠遠、山川間之。將子無死、尚能復来』天子答之曰『予歸東土、和治諸夏。万民平均、吾顧見汝。比及三年、將復而野』」とある。

(10)黄竹：伝説上の地名。馮浩は《穆天子伝》の内容から「黄竹当在嵩高之西、長安之東…」としている。

(11)穆王が南へ旅した際、黄竹へ向かう途中で北風と降雪に見舞われた。寒さに凍える人々を目にした穆王は、〈黄竹〉詩三章を作ってこれを哀れんだという。：《穆天子伝》巻五に「丙辰天子南遊于黄室之丘。…日中大寒、北風雨雪、有凍人。天子作詩三章以哀民。曰『我徂黄竹、口員閼寒、帝収九行、嗟我公侯、百辟冢卿、皇我万民、旦夕勿忘。我徂黄竹、口員閼寒、帝収九行、嗟我公侯、百辟冢卿、皇我万民、旦夕勿窮。有蛟者駘、翩翩其飛、嗟我公侯、口勿則遷、居樂甚寡、不如遷土、礼樂其民』天子曰『余一人則淫。不皇万民。』口登。乃宿于黄竹」とある。

(12)〈黄竹〉詩の内容：〈黄竹〉詩の原文は注(11)参照。大意は以下のとおり。

黄竹へ行くと、あたりは門を閉ざし寒さに凍えていた。その昔、帝は全国に道を開いて治めたという。ああ我が諸侯よ。君主や大臣はみな民衆をただすべく、そのことをいつも心に留めておかなければならない。

黄竹へ行くと、あたりは門を閉ざし寒さに凍えていた。その昔、帝は全国に道を開きこれを治めたという。ああ我が諸侯よ。君主や大臣はみな民衆をただし、どんなときも困窮させてはいけない。

白い鷺が悠々と飛んでいる。ああ我が諸侯よ。軽々しく土地を移してはいけない。だが一カ所にとどまっても樂が少なければ人々が安んじることとはなく、他郷へ移り住むよりも劣ってしまう。だから礼樂によって民衆を教化しなければならない。

(13)「言いたいこと、心に思うことを全て語り尽くしている。だが、詰問のことばを曖昧に表現しているので、語り尽くすといっても全てをことばにしているわけではないのだ」：「尽言尽意矣、而以詰問之詞吞吐出之、故尽而未尽」

(14)葉燮：清の人。紹袁の子。字は星期、号は己畦。康熙の進士より宝応知県となったが、弾劾さ

れて帰る。晩年は呉県の横山に居し、横山先生と称される。著書に《原詩》、《已畦詩文集》がある。

(15)「李商隱の七言絶句は、内に込められた意味が深く、しかも表現のしかたが婉曲である。このような詩は当分現れないだろう」：「李商隱七絶、寄托深而措辞婉、可空百代」

(16)《原詩》：一卷。

韓冬郎⁽¹⁾即席為詩相送、一座尽驚。他日余方追吟「連宵侍坐徘徊久」之句⁽²⁾、有老成之風、因成二絕寄酬、兼呈畏之員外（其一）

韓冬郎が即席に詩を為りて相ひ送り、一座尽く驚く。他日 余れ方に「連宵侍坐徘徊すること久し」の句に追吟せんとするに、老成の風有りて、因りて二絶を成して寄酬し、畏之員外に兼呈す。（其の一）

十 歳 裁 詩 走 馬 成	十歳 裁詩し 走馬にして成す
冷 灰 残 燭 動 離 情	冷灰 残燭 離情を動かす
桐 花 万 里 丹 山 路	桐花 万里 丹山の路
雛 鳳 清 于 老 鳳 声	雛鳳 老鳳の声よりも清し

この詩はながい題名を用いて、詩を詠むことになったいきさつを説明している。「冬郎」とは、晩唐の詩人韓偓の幼名である。韓偓の父親は韓瞻で字を畏之といい、李商隠とは旧友であり、あい婿（お互いの妻が姉妹）という関係でもあった⁽³⁾。

大中五年（851）の秋の終わりに、李商隠は都の長安を離れ梓州（今の四川省三台）に赴き、東川⁽⁴⁾節度使の柳仲郢⁽⁵⁾の幕府に入った。韓偓はこの時わずか十歳にして、送別の宴のとき即興で詩を詠むことができた。その才能はその場にいた人々を驚かせた。

大中十年、長安に戻った李商隠は、韓偓から贈られた詩を再び吟じて昔を思い起こし、それに答える七言絶句を二首詠んだ。これはその中の第一首である。

1

宴席に灯されているろうそくも残りわずかとなり、ろうそくの芯の燃えかすももう冷たくなってしまった。「冷灰残燭」という語を用いて、送別の宴がもう終わりに近づき、その場にいた人々が、いよいよ別れの時が来たという情（^{おもい}離情）を抱きはじめていることを示している。まさにこのもの寂しい雰囲気の中、十歳の冬郎に詩情がわき、あっという間に送別の詩を書きあげたのである。以上がこの詩の始めの二句（十歳裁詩走馬成、冷灰残燭動離情）における当時の情景を振り返った描写である。別れの宴のもようは簡単に説明し、冬郎が詩を書いたことを強調したのは、この詩のテーマの必要性による。

事実を記すのは始めの二句で終わり、後の部分では冬郎を称賛する内容に転じている。

では、どうすれば月並みなほめ言葉にならずにすむのだろうか。李商隱は比喻を用いて、冬郎親子を鳳凰に喩えた⁽⁶⁾。「雛鳳 老鳳の声よりも清し（雛鳳清于鳳声）」という表現で「出藍の誉れ」⁽⁷⁾を表した。抽象的な道理がこれによって具体的なイメージへと変えられている。

だが、これだけではまだ生き生きとした表現とはいえない。李商隱は、伝説の中にでてくる鳳凰が「丹山」で生まれ、梧桐^{あおぎり}に止まって翼を休めることを好んだことまでもさらに連想する⁽⁸⁾。そして想像を駆使することにより、このように人をうっとり魅了する一幅の「画」をえがきあげたのである。

はるか彼方の丹山の山道、美しい梧桐^{あおぎり}の花が野原を一面に覆う。その花の中に雛鳳^{ひなどり}の清らかで透きとおったさえずりが聞こえる。そのさえずりに老鳳^{おやどり}が渋味みのある力強い声で応じ、よりいっそう耳を楽しませてくれる。

なんと詩情あふれる描写なのだろう。この画を見ると、そこには冬郎の神童ぶりと卓越した詩の才能とがすべてありありと表れているのである。

生き生きとした連想とイメージを駆使して、現実の事柄を虚構の世界や画面の中に置き換えて表している。これは李商隱が詩歌で婉曲に意を表現するときのさらなる表現形式であるということができる。贈答歌は本来、平凡になりがちなものである。だが、「雛鳳声清」という名句によってこれまで絶えることなく伝わったのは、李商隱の後輩に対する切なる情^{おもい}がこめられているばかりでなく、このような表現形式とも深い関係があるのだ。

陳伯海（三枝秀子訳）

(1)韓冬郎：(844-923) 韓偓の小字。唐、萬年の人。字は致堯。唐書は致光、漁隱叢話は致元に作る。号は玉山樵人。父は韓瞻。字は畏之。李商隱と同じ歳である。十歳にして詩を能くす。龍紀の進士。官は昭宗の時、兵部侍郎・翰林学士承旨。後、機密を処決し、甚だ帝意に合す。屢々相に擬せられたが皆固辞す。後、朱全忠に悪まれ、鄧州司馬に貶せらる。天祐中、故官に復するも、全忠の逆節を惡み、肯えて朝に入らず、閩に避けて王審に依り、其の地に卒す。その詩は慷慨激昂、忠憤の氣に満つ。香奩集のみは縁情綺麗、艷体の一派を開き、香奩体と称せらる。《新唐書》卷183）〈十一月中旬至扶風界見梅花〉の注8に既出。

(2)「連宵侍坐徘徊久」劉学鍇・余恕誠著《李商隱詩歌集解》によるとこれは韓偓が贈った詩の中

に詠まれる句であるが、《翰林集》《香奩集》に収められず逸してしまったとのことである。

(3)韓瞻と李商隱は旧友であり、あい婿という関係でもあった：このことは〈韓同年新居餞韓迎家室戲贈〉の詩にも詠まれる。

(4)東川：鎮の名。唐の至徳の初、劍南東川節度使が置かれた。治は梓州。四川省三台県。大暦の初、東川觀察使が遂州に置かれた。四川省遂寧県治。尋いで節度に昇された。〈十一月中旬至扶風界見梅花〉注6に既出。

(5)柳仲郢：唐の人。公綽の子。字は諱蒙。元和13年（818年）の進士。官は刑部尚書。封は河東県男。このとき劍南東川節度使となっていた。（《旧唐書》卷165）〈十一月中旬至扶風界見梅花〉注7に既出。

(6)「鳳雛」も将来大物となる素質をもつ優秀な少年のことを喩える。例えば、陸雲は「六歳にして能く文を属る……閔鴻見て而て之を奇として曰く、此の児若し龍駒に非ざれば、当に是れ鳳雛なるべし。（六歳能属文……閔鴻見而奇之曰、此児若非龍駒、当是鳳雛）」と言われた。

(7)「出藍の誉れ」：《荀子》勸学篇「学不可以已、青取之於藍、而青於藍」

(8)鳳凰の伝説：《山海經》南山經「又東五百里曰丹穴之山。有鳥焉、其状如鷄、五綵而文、名曰鳳皇」

板橋曉別

回 望 高 城 落 曉 河
 長 亭 窓 戸 圧 微 波
 水 仙 欲 上 鯉 魚 去
 一 夜 芙 蓉 紅 涙 多

板橋曉別

高城を回望すれば 曉河 落ち
 長亭の窓戸 微波を圧す
 水仙 上らんと欲して 鯉魚 去り
 一夜の芙蓉 紅涙 多し

これは、恋人と別れを告げている詩である。題中の「板橋」とは、唐代、汴州の町の西にあった板橋宿⁽¹⁾を指す。ここはちょうど長安の西にある渭城と同じようなところである。旅人の往来が頻繁な宿場であり、また友人と別れを告げる場所でもある。李商隱のこの詩は、この詩固有の幻想的できらびやかな色合いを用いて、別れを告げる詩の新しい境地を切り開いている。

1

一句目（回望高城落曉河）は、来た道をふり返った時に見えた景色である。「高城」とは、汴州の町を指す。「曉河」とは明け方の天の川を指す。汴州の方をふり返って見ると、もともと町の上空に、高々と横たわっていた天の川が、この時刻になるともうその輝きも消え、西の地平線近くまで傾いてしまっている。明け方、かすかに白んできた空を背景に、町を囲む高い城壁のもうろうとした暗い影がぼんやりと現れている。

この恋人たちは、かつてこの汴州の町で忘れられない日々を過ごした。だから別れの際、後ろ髪を引かれ、失意に満ちた思いを抱き、頭をもたげて汴州をふり返らずにはいられなかったのである。さっきまで一緒に過ごしていた日々が、まるで遠い夢のようだとお互いが感じている。これはまるで宋の秦觀⁽²⁾が別離の詞の中で描いた「多少の蓬萊の旧事、空しく首を回せば、烟靄紛紛たり（蓬萊で過ごした長い日々。空しくふり返ってみると、霧がしきりに降っている）」⁽³⁾（〈満庭芳〉）という状態と同じである。

「落曉河」は、題中の「曉」の字を指すことは明らかだが、牽牛と織女が会える時間がすでに終わり、別れの時が目前に迫っていることを暗にほのめかしているのである。それだけではなく、この二人が別れの前夜に、別れをいつまでもおしみながら夜を明かしたであろう情景をもたやすく想像できる。

2

次の二句目（長亭窓戸圧微波）は、目の前に見える「板橋」の情景である。「長亭」とは、「板

橋」の上、もしくは「板橋」の近くに建っている水辺に面した楼閣のことである。それは昨夜、二人が別れの前に会った場所であり、なおかつ夜明けの時が来て、別れのことばを交わした場所でもある。「長亭」の窓の下では、さざ波が揺れて光を反射している。

「庄」の字は、楼閣の窓が水面のほうにせりだしている情景を描き出している。もうろうとした夜明けの中、さざ波のきらめく水辺にぼんやりと見える楼閣は、まるでまぼろしのごとく現れ出た仙界の楼閣のようである。月並みの別離の情景が幻想的で神秘的な色合いで脚色されているのである。

窓の下でゆらゆらと揺れているさざ波は、一方では昨夜一晩中揺れ動いていた二人の感情のうねりを私たちに連想させる。そして、もう一方では、もやの立ちこめる水面が行く手に果てしなく続いていること（板橋の下は有名な通済渠である）とも結びついている。この二つのことが合わさると、いわゆる「柔情水に似て、佳期夢の如し（彼女のやさしい思いは水のように、あのすばらしい日々は夢のようだった）」⁽⁴⁾（秦観〈鵲橋仙〉）という意味にもなるのである。

二句全体としては景色を描いているが、そこに描かれている世界は、夕べに会い朝に別れる牽牛と織女のことによく似ている。だから一句目で描かれている「高城に曉河落つ」という景色と、自然に溶けあって一つになるのである。

3

一、二句の両句は、実際の景物を描く中に幻想的で神秘的な色合いが微かにあらわれている程度に過ぎないと言うのであれば、三、四句はすっかり神話世界に入り込んでしまっていると言える。

三句目の「水仙欲上鯉魚去」の句は、琴高のことがらを暗に用いている。《列仙伝》では以下のように言っている。

琴高は、戦国時代の趙の人で、仙人の術を使いこなした。かつて赤い鯉に乗ってやって来て、ひと月ばかり逗留し、ふたたび水中に入って帰っていった。⁽⁵⁾

ここでは、旅立つ人を、鯉に乗って波をこえて行く「水仙（水の中に住む仙人）」に暗に喩えている。ここから旅立つ人は、舟に乗って水路を西へ行くのである。「板橋長亭（板橋の上に建っている楼閣）」の下には、この時間ちょうど小舟が停泊して出発を待っている。

前の一、二句が描いている幻想的な色合いを帯びた景色に触発されて、三句目ではさらに進んで浪漫主義的な想像の世界が作り出されている。「方に留恋の所、蘭舟 発するを催す（ちょうど名残りを惜しんでいると、木蘭の船が出発をせきたてている）」⁽⁶⁾（柳永⁽⁷⁾〈雨霖鈴〉）という現実の場面を、「水仙 上らんと欲し、鯉魚去る」という神話の世界に変化させているのだ。だから、このように詩のイメージは幻想的であっても、目の前の景色とぴったり一致しているので、自然で真実のように感じられるのである。

《楚辞》九歌・河伯の中には、この句のように描写された「子と手を交えて東行し、美人を南浦に送れば、波は滔滔として来たり迎え、魚は鱗鱗として予に^{したが}勝ふ（うるわしいあなたと手を取りあって東にむかい、あなたを南の浦辺までお送りしたとき、なみはとうとうとして迎えに来て、魚は相連なってわたしたちに付きしたがったのである）」⁽⁸⁾という送別の場面がある。「水仙」の句は、この部分の影響を受けているようだ。ただ、この詩で描かれている境地のほうが、おとぎ話のような純朴な味わいをより多く備えているだけに過ぎない。

4

末句（一夜芙蓉紅涙多）は、視点を移して見送る者のことを描いている。「紅涙（紅いなみだ）」は薛靈芸⁽⁹⁾の故事を暗に用いている。《拾遺記》には、以下のように言っている。

魏の文帝の寵姫である薛靈芸は、両親と別れて車に乗り出発するとき、玉製のたんつぼで涙を受け、つぼは紅い色になった。都に着くと、つぼの中の涙は、固まって血のようになっていた。⁽¹⁰⁾

四句目では、見送る人を水に浮かぶ「芙蓉（ハスの花）」に喩えて、その女性の美しくあでやかなさまを表現している。また紅い色をしている「芙蓉」から、さらに想像を押し進めて「芙蓉」が流す涙もとうぜん「紅涙」であるとしている。

このような天真爛漫な想像の世界は、李賀の〈金銅仙人 漢を辞すの歌〉の中の「君を憶ふ清涙は、鉛水の如し（武帝さまを思い出して清らかな涙がとけた鉛のように、こぼれたのだった）」⁽¹¹⁾という句にあらわれている奇想天外な世界とよく似ている。ただこの句のよさは、おもに趣きのある書きぶりにあらわれていると言えよう。ここでは、旅立つ人の視点から見送る人を描いているけれど、見送る人の「曉別（朝の別れ）」の様子を直接書くのではなく、昨夜この「芙蓉」のような恋人が、ひどく悲しんでいた様子を回想しているのである。これはたんに題名の「曉別」ということばにもとづいて、つらい別れを惜しみあった昨夜の情景を描き出しているだけではない。別れを惜しんだ昨夜の情景を描くことによって、「曉別」の耐え難さをいっそう強くただよわせているのである。昨夜の「長亭窓戸（楼閣の窓）」の中での「^{ろうしょく}蠟燭心有りて 還た別れを惜しむ。人に替はりて涙を垂れ天明に到る（ろうそくは芯が残っていて、まだ別れを惜しんでいるかのよう。夜明けまで、人に替わって涙をながしているようだ）」⁽¹²⁾という情景や、今朝の「板橋曉別」のときの「^{ぎょうえつ}手を執りて相ひ涙眼を看、竟に語無く凝噎す（手を取り合って、互いに涙を含んだ眼と眼を見つめたまま、ついに言葉もなく、ぬせび泣く声をのむ込んだ）」⁽¹³⁾（柳永〈雨霖鈴〉）というような暗く悲しい状況のいずれもが、あたかも目の前で繰り広げられている出来事のようになっている。

好んで古い小説や神話の中から詩の題材を取り入れ、詩の目新しい浪漫主義的な雰囲気と、幻想的であてやかな色合いを作り上げるのは、李商隱の詩歌の一つの特徴である。しかし、この詩のように、伝奇小説のような書きぶりでありふれた離別のことを、現実と幻想とを融合させ、色あざやかなおとぎの世界を作り出しているのは、送別の詩全般で考えてみても、確かにほとんではない。先人も「義山に奇趣多し」⁽¹⁴⁾（張戒⁽¹⁵⁾《歲寒堂詩話》⁽¹⁶⁾）との言を残しているが、平凡な題材を目新しく、空想的に描くのは、まさしく「奇趣」⁽¹⁷⁾といわれる作風の一つである。

劉学諧（秋谷幸治訳）

(1)板橋：現在の河南省開封県の西にあたる。

(2)秦觀：宋・高郵の人。字は少游、又、太虚。号は邛溝居士。世に秦淮海と称せらる。文詞にたくみ。元祐の初め、蘇軾、賢良方正を以て朝に薦む。官は太学博士・国史院編集館。著に淮海集がある。

(3)「多少の蓬萊の旧事、空しく首を回せば、烟靄紛紛たり」：秦觀〈滿庭芳〉には「山抹微雲、天連衰草、画角声断譙門。暫停征棹、聊共引離尊、多少蓬萊旧事、空回首、煙靄紛紛。斜陽外、寒鴉萬点、流水繞孤村」とある。

(4)「柔情水に似て、佳期夢の如し」：秦觀〈鵲橋仙〉には「柔情似水、佳期如夢、忍顧鵲橋歸路。兩情若是久長時、又豈在、朝朝暮暮」とある。

(5)《列仙伝》の原文を示すと次のようになる。「琴高者、趙人也。以鼓琴為宋康王舍人。行涓、彭之術、浮遊冀州、涿郡間二百余年。後辞入涿水中取龍子、与諸弟子期曰、『皆潔齋侍於水旁、設祠』果乘赤鯉来出坐祠中。留一月余、復入水去」

(6)「方に留恋の所、蘭舟 発するを催す」：柳永〈雨霖鈴〉には次のようにある。「寒蟬淒切、对長亭晚、驟雨初歇、都門帳飲無緒、留恋处、蘭舟催発、執手相看淚眼、竟無語凝噎、念去去、千里煙波、暮靄沈沈楚天闊」

(7)柳永：宋、崇安の人。字は耆卿。初名は三變。景祐元年の進士。詞に巧み。著に《樂章集》がある。

(8)「子と手を交えて東行し、美人を南浦に送れば、波は滔滔として来たり迎え、魚は鱗鱗として予に勝^{したが}ふ」：《楚辞》九歌・河伯には次のようにある。「与女遊兮九河、衝風起兮橫波、乘水車兮荷蓋、駕兩龍兮驂螭、登崑崙兮四望、心飛揚兮浩蕩、日將暮兮悵忘歸、惟極浦兮寤懷、魚鱗屋兮龍堂、靈何為兮水中、乘白龜兮逐文魚、与女遊兮河之渚、流澌紛兮将来下、子交手兮東行、送美人兮南浦、波滔滔兮来迎魚鱗鱗兮勝予」

(9)薛靈芸：三国魏、文帝の寵姫の名。後、夜来と改める。

(10)《拾遺記》の原文を示すと次のようになる。「魏文帝美人薛靈芸、常山人也。別父母、升車就路、以玉唾壺承淚、壺則紅色。及至京師、壺中淚凝如血」

(11)「君を憶ふ清淚は、鉛水の如し」：李賀〈金銅仙人辭漢歌〉には次のようにある。

魏官牽車指千里　魏官車を牽きて千里を指し
東関酸風射眸子　東関の酸風　眸子を射る
空將漢月出宮門　空しく漢月と將に宮門を出づれば
憶君清淚如鉛水　君を憶ひて、清淚　鉛水の如し

(12)「蠟燭心有りて還た別れを惜しむ。人に替はりて涙を垂れ天明に到る」：杜牧〈贈別〉二首に次のようにある。

多情卻似総無情　多情卻て総て情無きに似たり
唯覚尊前笑不成　唯だ覚ゆ尊前に笑ひ成さざるを
蠟燭有心還惜別　蠟燭心有りて還た別れを惜しむ
替人垂淚到天明　人に替はりて涙を垂れ天明に到る

(13)注の6 既出。

(14)「義山に奇趣多し」：「義山多奇趣」

(15)張戒：宋、正平の人。進士。紹興中、趙鼎の薦により国子監丞を授けられ、司農少卿に累進す。趙鼎が外任に改められた時、その留任運動に坐し、佐宣教郎を以て台州崇道觀を主管す。書室を歲寒堂といい、著に《歲寒堂詩話》がある。

(16)《歲寒堂詩話》：二卷。宋の張戒の撰。漢魏から、宋の蘇軾・黄庭堅にいたるまでの詩を通論しており、全体が七十余条からなっている。李白・杜甫を貴び、陶淵明・阮籍を推しているという特徴がある。

(17)奇趣：めずらしいおもむきをもった文芸作品を褒め称えることば。

(2004年 9 月25日受理)